

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月15日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520749

研究課題名（和文） アメリカ移民労働史の再検討ートランスナショナル・アイデンティティ・アプローチ

研究課題名（英文） A Reexamination of American Immigrant Labor History: Through the Transnational Identities Approach

研究代表者

山内 昭人（YAMANOUCHI AKITO）

九州大学・人文科学研究院・教授

研究者番号：00124850

研究成果の概要（和文）：

本研究は、アメリカ移民労働史の再検討を試み、各自がそれぞれロシア人移民、アナーキスト・ユダヤ人移民、ハンガリー系移民（特に女性）、及びドイツ系ボヘミアないしチェコ系移民を対象に、各移民労働者のコミュニティやグループ内で、いかに「トランスナショナル」な関係性が築かれ（或いは失われ）、それに伴って「トランスナショナル・アイデンティティ」が形成（或いは喪失）されていったかの、日本においては先駆的となる解明を進めることができた。

研究成果の概要（英文）：

In this research we tried to reexamine the American immigrant labor history and treated as an object of research the Russian immigrants, the Jewish immigrant anarchists, Hungarian (especially female) immigrants, and the German-Bohemian or Czech immigrants, respectively. We could throw light on how they built up (or broke off) "transnational" relations in their communities and groups and, accordingly, how they established (or lost) "transnational identities," which was the pioneering research in this field in Japan.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	2,100,000	630,000	2,730,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野： 西洋史

科研費の分科・細目： 南北アメリカ史

キーワード： 移民労働史、トランスナショナル

1. 研究開始当初の背景

本研究の計画に際して、特に以下に掲げる先駆的な研究から示唆を得た。

(1) 馬場伸也・梶田孝道編著『非国家的行動主体のトランスナショナルな活動とその相互行為の分析による国際社会学』（1977-79

年度科学研究費総合研究）：国際交流が交通・通信の全地球的発展と相俟って国家の枠組を越えて（transnational）多元化しつつあるとの認識から出発し、国民国家をも含む様々な行為体が相互作用する「一つの国際社会」を措定し、歴史研究から現代社会分析へ

と進んだ本研究は、グローバル化した今日の関連する議論を先取りしたものであり、その方法論はなお有効性を持つ。

(2) M. van der Linden, *Transnational Labour History* (2003) : アメリカ労働史のトランスナショナルな再解釈を提起したファン・デア・リンデンの本研究によれば、アメリカ労働史の考えられるすべての側面は、トランスナショナルな再解釈の余地があり、人・資本・情報及び思想の国境を越えた移動が重く考慮されたとき初めて合衆国の労働階級及び運動の展開は理解されうる。その際、労働組合など制度的側面ばかりではなく、移民労働者に見られる文化的特質にも分析対象を拡大する必要がある。そのためには、1990年代に社会学・人類学で提起された「トランスマイグランツ」、つまり「その日常生活が国境を越えた複合的かつ恒常的な相互関係に依存し、その公的アイデンティティが一国以上の国民国家との関係において形づくられるところの移民」という概念が有効であり、それは社会学で提起されてきた複合アイデンティティを前提とした概念である。かくして、トランスナショナル・アイデンティティ・アプローチによるアメリカ移民労働史の再解釈は、移民を、国境を越えて成立する多様な関係性のネットワークの中で自らの生活や理念の「集合性」を時には創造しうる主体的・能動的な存在＝「トランスマイグランツ」として再定義することを可能にした。

(3) B. Anderson, *Under Three Flags* (2005) : アンダーソンの本研究は、多言語・多文化など多様な要素を内面化し、国境を越えて移動する個人（ナショナリストやアナキスト）が創出する政治思想・運動を解明した試論であり、その中で採用された「ノマド」概念は、「トランスマイグランツ」と通底する性格を持つ。

本共同研究者のうち特に研究代表者のこれまでの研究との関連性が見られる(2)のトランスナショナル・アイデンティティ・アプローチによるアメリカ移民労働史の再解釈は、今後発展しうるものと考えられ、その延長線上に本研究は位置づけられた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、従来ナショナル・ヒストリーに組み込まれてきたアメリカ移民労働史を、ヨーロッパ史をも含めたトランスナショナル・ヒストリーとして再検討することを目的とする。そのために本研究は、移民労働運動における個人・集団等のアクターを「トランスマイグランツ」(transmigrants)と規定し、彼らのトランスナショナルな諸側面を明らかにするトランスナショナル・アイデン

ティティ・アプローチを採用し、これにより、従来看過されてきた個人と様々なグループの諸活動、労働者の生活世界、そして個人・集団により表明されるアイデンティティにいかなるトランスナショナルな特質があるかを解明する。

3. 研究の方法

申請時に記した「研究計画・方法」を実施にあたり一部変更を余儀なくされたため、実際に行った「研究の方法」を以下記すことにする。

本研究はドイツ、東欧、ロシアを主たるフィールドとした研究者4名によって構成され、日本のアメリカ史研究ではあまり見られない研究組織であり、その特色を活かして、各自以下のように分担した。

(1) 研究代表者山内昭人は、ロシア人移民労働運動を扱い、在米ロシア人社会主義運動はもとよりアナキスト系の在米ロシア人労働者同盟など関係史料調査のため、アメリカ国立公文書館、議会図書館、ニューヨーク公共図書館、ニューヨーク州公文書館及びコロンビア大学バフメチェフ文庫へ赴いた。

(2) 研究分担者田中ひかるは、アナキスト及びユダヤ人移民労働者を扱い、ユダヤ系移民が書いた未公開回想録など関係史料調査のため、ニューヨークのイディッシュ研究所及びニューヨーク公共図書館へ赴いた。

(3) 同山本明代は、ハンガリー系移民(特に女性)労働者を扱い、IWWハンガリー支部、東欧移民女性など関係史料調査のため、ハンガリーの国立図書館へ赴いた。

(4) 同大津留厚は、ドイツ系ボヘミア移民及びチェコ系移民を扱い、東欧移民の送り出し国側の関係史料調査のため、チェコ国立図書館へ赴いた。

最終年度の10月、各自が2年半にわたる研究の成果を、九州西洋史学会秋季大会のシンポジウム「アメリカ移民労働史研究の再検討——ヨーロッパとアメリカをつなぐ視点から——」でアメリカ労働運動史研究の第一人者である野村達朗・愛知県立大学名誉教授をコメンテーターに迎えて別項記入の題目で発表し、そこでの質疑応答等を踏まえて最終的な研究成果をまとめた。

4. 研究成果

共同研究を始めるやいなや実際の研究対象を、「研究の目的」で記したような理論設定に合致する対象として捉えることの困難に直面し、本共同研究では一定の結論に至らず、各自が明らかにしえたのはその一端にとどまった。けれども、従来の研究では未着手

の移民労働史の諸側面がヨーロッパ史とのつながり中で解明されはじめたと言えよう。

その一端を以下、各タイトルの下、個別に記していくことにするが、残された研究課題を先に掲げておく。すなわち、個別のエスニック・コミュニティやグループ内で、いかに「トランスナショナル」な関係性が築かれ（あるいは失われ）、それに伴って「トランスナショナル・アイデンティティ」が形成（あるいは喪失）されていったかは、程度差はあれ、それなりに解明できたが、それらを複数のエスニック・コミュニティないしグループの広範囲にわたる関係史へと総合化することである。あるいは、その関係史の中で起こりうる変容過程の追究であろう。

(1) 山内昭人「在米ロシア人移民労働運動史研究——在米ロシア人コロニー統一の試みを中心に」

ロシア2月革命勃発後、在米ロシア人政治亡命者ないし移民は、帰国準備及び革命政権支援のため、ロシア人市民のアメリカ軍選抜徴兵の動きへの対処のため、そして1917年6月に到着した駐米ロシア大使バフメチェフとの関係をどのように結ぶかの検討などのため、アメリカ国内での組織統一、つまり在米ロシア人コロニー統一を求める運動を急激に展開していった。その試みは当初、①ニューヨークのアメリカ社会党ロシア人部、②ロシア人労働者同盟の指導部を占めたアナキスト・グループ、③バフメチェフを支持する市民グループの間で試行錯誤された。三者によって統一組織委員会が設立されたが、出発支援及び選抜徴兵に対するロシア大使の対処の生ぬるさを批判する①と②は、最終的に③の参加を断り、1918年2月に第1回全ロシア人コロニー大会をニューヨークで開催することになった。

大会はロシア国籍保持者の徴兵不可などの決議とともに、ロシア人労働者コロニーの組織形態として労働者代表ソヴェトの創設、諸ソヴェトの連盟形成及びソヴェト大会の計画をも採択した。大会は「在米ロシア人移民の歴史において初めて」曲がりなりにも「ロシア人コロニーを統一し」、「これは合衆国とカナダのあらゆる方面に分離され、分散させられているロシア人組織の団結の始まりであ」った。この在米ロシア人移民の歴史において初めて団結の始まりである全ロシア人コロニー大会及び労働者代表ソヴェト創設の試みの中に、「国境を越えて成立する多様な関係性のネットワークの中で自らの生活や理念の『集合性』を時には創造しうる主体的・能動的存在」の可能性をみるこ

はできないだろうか？

しかし今度は、①と②が、同ソヴェト創設の試みの中で対立し、②によってのみ1919年1月に第2回全ロシア人コロニー大会が開催されることになった。この対立は、今ロシアで起こっている「勢力範囲を決めるプロセス」の反映であった。

大会をボイコットした①はアメリカ共産主義政党創設へ注力していき、他方、②は大会で新執行委員会を選出したが、その中でも対立が生じ、一部の分派だけが強引に第3回全ロシア人コロニー大会を1921年3月に開催した。しかし、そこでの決定事項は政治的対立・分裂や政府による弾圧下で掛け声倒れに終わり、これ以後、在米ロシア人コロニーの統一運動は終熄していった。

1921年初めの段階では在米ロシア人移民のソヴェト・ロシア政権への支持ないし中立的関心の高さは依然保たれていた。ロシア人移民労働者にとって、ロシア革命の帰趨は他人事ではなく、良くも悪しくも革命ロシアでの対立関係が彼らの運動に大きな影響を及ぼさざるをえなかった。統一の試み自体がその対立関係の波をもろにかぶり、アメリカ政府による弾圧下で四分五裂していった。

結局のところ、在米ロシア人コロニーの統一をめざしたロシア人移民労働者の中に（ロシア革命を機にその可能性が高まった）トランスナショナル・アイデンティティの形成をみるには、（これまた革命が引き金となって生じた）多くの内的・外的阻害要因がありすぎたと言えよう。

ファン・デア・リンデンは、「労働者トランスナショナリズム」という概念を提起し、それを三つの側面、①連帯、②組織モデル、③産業関係（労働関係）からアメリカ労働史の再検討に活かそうとした。本研究では、①は当然として、②については、帰国するだけでなくアメリカの地でロシア人コロニーの統一をめざし、（③までは達しえなかったが）その組織形態として労働者代表ソヴェトの創設途中までいったことで説明した。その運動の中で、かつて「工場街の煙の中へと消えた」民族的アイデンティティが、主体的なそれとして一時期であれ復活した事実を掘り起こすことができた。

(2) 田中ひかる「アナキスト赤十字による活動 1905-1920年——国境を越えるユダヤ系移民アナキスト」

従来のアメリカ移民労働史研究では、移民がアメリカ人になる／ならない、エスニック・アイデンティティ（文化）を持つ／持たない、という点が問題となっていた。しかし近年では移民のトランスナショナルな経験

に注目する研究が増え、また、そのような経験を持つ移民がアナキズムを支持したという事例が多数報告されている。この事象を検討する上で、アナキスト赤十字の事例は重要である。

アナキスト赤十字は、ロシアで投獄・流刑されたアナキストを救援するためにロンドン、及びニューヨークをはじめとするアメリカ各地で1905-1910年、及び1922-1926年頃にロシア出身のユダヤ系移民労働者を中心にして設立された組織だった。その活動は次のようなものだった。まず、アナキストを自認する若い男女のユダヤ系移民は、「囚人ダンスパーティー」やエクスカージョンなどのイベントを開催し、収益金を集めた。「囚人ダンスパーティー」は、1911-1917年の毎年冬に開催されたイベントだった。1913年以降は8,000人を収用できる大ホールを会場とし、夜の7時半頃から明け方の3時まで開催され、楽隊による演奏にのって若い男女が踊り明かしたと推測できる。パーティーでは、アナキスト赤十字のメンバーたちが演じる、ロシアで投獄されているアナキストたちにまつわる様々な場面が「活人画」として展示された。1914年から毎年夏には、遊覧船によるクルーズが実施されていた。船上ではバンド演奏やゲームがあったようである。

以上のようなイベントで集められた収益金の一部はロシアに送金され、一部は、ロシアの囚人に送られる物資の購入費と送料にあてられたが、さらに、ロシアの監獄の劣悪さを訴えるという目的で、囚人から送られてきた手紙を公表するためのイディッシュ語とロシア語の両言語で書かれた雑誌の発行や、囚人たちに手紙を送る活動にあてられた。ロシアの監獄では、法律に基づいて、囚人宛の手紙は親族から送られ、ロシア語で書かれたものしか受け付けず、厳しい検閲を受けたため、ロシア語ができ、かつ投獄経験があるような人びとしかこの活動には加われなかった。それでも、60-100名程度のメンバーが、ひとりあたり10名以上の囚人を担当して手紙を書き、時には偽造パスポートや資金を見つからないようにして送り、脱獄や流刑地からの脱走の支援を行った。送金や物資の送付が物質面の支援だったとすれば、手紙の送付は精神面での支援だったと言える。

1917年3月にロシアで革命が勃発して臨時政府によって政治犯への恩赦が出された、という報に接した多くのロシア出身の移民たちは、家族を引き連れてロシアに帰還し、革命に参加する。アナキスト赤十字はその目

的を失い活動を休止するが、アメリカ政府による左翼弾圧の結果投獄された人々、そして、ボリシェヴィキによってロシアで弾圧されたアナキストを救援するために、ロンドンやニューヨークで再建される。しかし、帝政時代と異なり、ロシアで投獄・流刑されたアナキストとの交信は極めて困難であり、1939年頃には一切の交信が途絶えた。その後、救援活動の拠点はシカゴに移り、支援対象はナチスに迫害されたアナキスト、戦後のヨーロッパのアナキスト、さらには日本・朝鮮半島のアナキストへと移っていった。その遺産は、今日アメリカなどで活動しているAnarchist Black Cross等に受け継がれている。

(3) 山本明代「1926年パセーイク・ストライキにおける東欧移民労働者の実践と支援活動」

1926年1月ニュージャージー州パセーイクの毛織物工場労働者15,000人が賃金カットに反対してストライキを開始した。本報告では、1926年パセーイク・ストライキにおいて東欧移民労働者はいかに闘ったのか、そしてこのストライキへの支援活動はどのように展開したのか。この事例を通して、1920年代のアメリカ合衆国における東欧移民労働者の位置づけとトランスナショナルな関係性を検討した。

1926年パセーイク・ストライキは、賃金10%カットと労働時間短縮に抗議し、1926年1月25日に始まり、翌年3月1日に終結した。ストライキの発端であり中心となったのはパセーイク最大の毛織物工場ボタニー梳毛工場だった。工場労働者は多くが移民労働者から成り、多数を占めたのがポーランド、イタリア、ロシア、ハンガリー系だった。

ストライキを組織したのは、織物労働者統一戦線委員会であり、アメリカ労働党の労働組合教育同盟（以下、TUEL）が主導的役割を担った。ストライキのリーダーとなったのは、TUELの活動家アルバート・ヴァイスボードだった。統一戦線委員会の要求は、賃金カット10%停止、超過労働に1.5倍の賃金、週44時間労働、組合の承認、工場の衛生状況の改善、差別撤廃だった。

当時パセーイクのハンガリー系住民約5,000人のうち、2,000人の男女が毛織物工場に働いていた。ハンガリー系労働者のストライキ委員会委員長となったデアーク・グスターヴは、ヴァイスボード逮捕後に織物労働者合同組合を率いた。ハンガリー系労働者の集会では、労働者の連帯意識と故国への意識

やハンガリーの労働者をつながるトランスナショナルな意識が鼓舞された。

ストライキやデモを阻止するために派遣された警官隊が女性や子ども、ジャーナリストに暴力をふるう様子が新聞やメディアで大々的に報じられたことから、ストライキへの共感が市民へと広がった。ニュージャージー州騒擾取締法と警官隊による市民権の侵害に対する抗議の声は、労働者国際救済などの人権団体からの支援を導いた。女性労働者たちもデモを組織し、労働者階級主婦連合協議会は、食事を提供する「キッチン」を開設・運営した。ここに、階級やエスニシティを越えた連帯の広がりを見ることができる。また、女性たちが組織化の経験を有し、ストライキ戦略を発揮していたこともわかる。また、労働者国際救済が広報戦略を立て、メディアや広報が効果的に活用され、ストライキへの共感は広く市民層にも広がった。

第一次世界大戦後、アメリカの東欧移民の間では市民権取得が徐々に進んでいた。しかし、労働の場においては、東欧移民労働者はアメリカ生まれであっても、不熟練のパートタイムを強いられ、底辺に置かれていた。しかし、それゆえに労働者の間ではトランス・ナショナルな連帯が広がっていた。それは、ストライキの闘いや支援活動にみられたように、国境を越え、エスニシティや人種、階級をも越え、女性や子どもも主体者となる結合だった。今回はストライキの中でいかに多様な「トランスナショナル」な関係性が生まれていったかを見るという作業であった。これからアメリカ化のプロセスとは異なる、国民史を越えた歴史像の提示を試みていきたい。

(4) 大津留厚「ボヘミア、アメリカ往還—遅れてきたエスニックグループの失われたアイデンティティ」

1972年に刊行された『ミネソタ・ヒストリー』誌には、ミネソタへ移民したチェコ人の新世界との遭遇が率直に語られている手紙が掲載されていた。この手紙は1970年に、現在スロヴァキアの首都となっているブラティスラヴァで発行された『アメリカ合衆国に移民したチェコ人、スロヴァキア人の手紙』に掲載されたものの英訳であった。そしてこの本を編集したのがヨゼフ・ポリシェンスキーであった。ポリシェンスキーはこの移民たちの足跡を調査研究した自分の経験に照らして、歴史記述の中心に「人間」を置くことを提唱した。それは「人間の顔をした社会主義」の実現を掲げる「プラハの春」の歴史学会におけるマニフェストだった。

それはアメリカ合衆国にとっても、ベトナム反戦運動を契機に始まった既成秩序に対する疑問の一環として移民史研究にも大きな転換があった時期であった。そこでは移民集団の文化的伝統に根ざした主体的なエスニック・アイデンティティの確立が強調された。「オワットナからの手紙」はアメリカの歴史学とチェコの歴史学の幸福な邂逅を意味していた。しかしその邂逅は瞬時にして終わった。1968年8月ワルシャワ条約機構軍がチェコスロヴァキアに侵攻し、プラハの春は終わった。

ミネソタ州の州都セントポールから南西方向に50キロメートルほど行くと、ニュー・プレイグという町がある。町のメインストリートにはシューマッハーという名のホテルがあって、その中にチェコ風の料理を出すレストランがあった。この町で目を引くのは、建物の壁面にこの町の歴史が表現されていることである。この壁画が作られたのが1989年、正にこの年の10月にベルリンの壁が崩壊することになる。アメリカ合衆国在住のチェコスロヴァキア系の人たちもようやく自分たちのルーツを語れる時がきた。ニュー・プレイグの壁画はそのことをよく物語っていた。しかしそれはあまりにも遅い「新プラハの春」だった。壁画が作られて20年経った2008年、町のチェコ系社会の象徴であったシューマッハー・ホテルは廃業し、壁画が描かれた建物の一つは解体され、一つは焼失していた。

ニュー・プレイグのチェコ系の人たちと時を同じくして、ボヘミア出身のドイツ系の人たちも自己を語り始めた。そこにはボヘミアのチェコ系移民たちとはまた異なる体験があった。ドイツ系の移民たちは、第一次世界大戦にアメリカ合衆国が協商側で参戦すると敵国民として差別の対象となった。第二次世界大戦の時にはドイツ系移民たちはアメリカ合衆国の反ナチ感情に堪えなければならなかった。1984年になって漸くボヘミア・ドイツ系伝統保存協会がニュー・アルムに設立された。この事業の延長線上に1991年にボヘミア・ドイツ系移民記念像がニュー・アルムのドイツ公園に設置された。

その後、アメリカ合衆国のボヘミア・ドイツ系の人々は毎年故郷を訪れるツアーを組んでいる。しかし彼らの「故郷」には、第二次世界大戦後ドイツ人たちが追放されたあとでチェコ人やスロヴァキア人たちが入植していた。そのためこの地域の民族構成はすっかり変わってしまった。アメリカ合衆国のボヘミア・ドイツ系の人々のツアーは、彼ら

のアイデンティティの表出の一つと考えられるが、彼らが実感するのは「故郷喪失」という現実だった。

ミネソタ州で隣り合わせで生活するボヘミアからのチェコ系移民とドイツ系移民。彼らの間の微妙な関係、故国の変動、アメリカ合衆国での経験、その複雑な相関関係の中で生じるアイデンティティの創出と喪失、それを実態に即して追究していくことが今後も課題となる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 12 件)

- ①山内昭人「在米ロシア人移民労働運動史研究ノート(2)」『史淵』査読無、149 輯、2012、31-78
- ②田中ひかる「ロシアで投獄されたアナキストを救援するための組織とその活動について～ニューヨークのアナキスト赤十字を中心に 1905～1920 年代」『歴史研究』査読無、49 号、2012、47-88
- ③山内昭人「在米ロシア人移民労働運動史研究ノート(1)」『史淵』査読無、148 輯、2011、37-65
- ④田中ひかる「ロシア出身のユダヤ系移民アナキストについての考察—ジュリアン・シンガー・グッドマンの生涯及びアナキスト赤十字の活動—」『歴史研究』査読無、48 号、2011、97-138
- ⑤大津留厚“My Journey to Bohemian-Homeland,” *Heimatbrief-Newsletter Magazine of the German-Bohemian Heritage Society*, 査読無、22 巻 1 号、2011、10-12
- ⑥山本明代「東欧移民のコスモポリタニズムと「市民権」」『アメリカ史研究』査読有、33 号、2010、40-58
- ⑦田中ひかる「アメリカ合衆国におけるロシア系移民アナキスト——1880 年代から 1920 年代——」『歴史学研究』査読無、589 号、2009、96-105
- ⑧山本明代「ハンガリー国民共同体の形成と移民のネットワーク」『ヨーロッパ・ロシア・アメリカのディアスポラ』(駒井洋・江成幸編) 査読無、2009、260-274

[学会発表] (計 5 件)

- ①山内昭人、在米ロシア人移民労働運動史研究——在米ロシア人コロニー統一の試みを中心に、九州西洋史学会、2011 年 10 月 15 日、九州大学
- ②田中ひかる、アナキスト赤十字による活動 1905-1920 年——国境を越えるユダヤ

系移民アナキスト、九州西洋史学会、2011 年 10 月 15 日、九州大学

- ③山本明代、1926 年パセイク・ストライキにおける東欧移民労働者の実践と支援活動、九州西洋史学会、2011 年 10 月 15 日、九州大学
- ④大津留厚、ボヘミア、アメリカ往還——遅れてきたエスニックグループの失われたアイデンティティ、九州西洋史学会、2011 年 10 月 15 日、九州大学
- ⑤田中ひかる、アメリカ合衆国におけるロシア系移民アナキスト——1880 年代から 1920 年代——、歴史学研究会、2009 年 5 月 24 日、中央大学

[図書] (計 4 件)

- ①山本明代、風媒社、『反響する文学』(土屋勝彦編)、2011、121-153
- ②田中ひかる、日本経済評論社、『国民国家の境界』(加藤哲郎編)、2010、229-247
- ③山内昭人、ミネルヴァ書房、『初期コミンテルンと在外日本人社会主義者——越境するネットワーク——』、2009、343

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山内 昭人 (YAMANOUCHI AKITO)
九州大学・大学院人文科学研究院・教授
研究者番号：00124850

(2) 研究分担者

田中 ひかる (TANAKA HIKARU)
大阪教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：00272774
山本 明代 (YAMAMOTO AKIYO)
名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・准教授
研究者番号：70363950
大津留 厚 (OTSURU ATSUSHI)
神戸大学・大学院人文学研究科・教授
研究者番号：10176943